普段着のわたしたち

思う所があって『サザエさん』全巻大人買いをしてしまいました。マンガとして大変おもしろい作品であることは間違いないのですが、実は昭和 20 年代から 40 年代までの歴史資料でもあるのです。そういえば大学の授業でも使われていました。

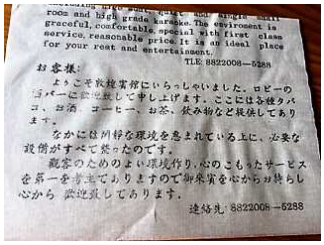
現代日本を舞台としたマンガはその時代の生きた記録となるのです。

法然上人の生きられた平安時代末での生きた記録と言えば「日記」がそれに当たると言えます。法然上人の最大の支援者であった関白九条兼実公の日記『玉葉』は大変貴重な資料となっています。　征阿

98 年に敦煌ホテルに宿泊した際、部屋に置かれていた案内。

「…なかには閑静な環境を恵まれている上に、必要な設備が全て整ったのです。

観客のためのよい環境作り、心のこもったサービスを第一を考主でありますので御来賓を心からお待ちし心から歓迎いたしてあります。」


graceful, comfortable, special with first class service, reasonable price. It is an ideal place for your rest and entertainment.
TEL 882200８－5288

お客様：
ようこそ敦煌賓館にいらっしゃいました。ロビーのラウンジに歓迎して申しあげます。ここには各種タバコ、お酒、コーヒー、お茶、飲み物など提供してあります。
なかには閑静な環境を恵まれている上に、必要な設備がすべて整ったのです。
観客のためのよい環境作り、心のこもったサービスを第一を考主でありますので御来賓を心からお待ちし心から歓迎してあります。
連絡先 882200８－5288

誰かチェックする人はいなかったのだろうか。

20 年前の中国の西の果て。日本語で書いてあるだけで十分か。

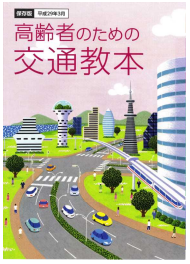
敦煌の話は本編に続きます。訶梨帝母

先日、あるお寺で 120 人程の「稚児行列」が実施されました。これをお手伝いしていた方の報告です。

ご近所をお練りして境内に戻り間もなく稚児の行列が急に停止、しばらく停滞してしまいました。様子を見に行くと、参加者の小さな男の子が、本堂横の弁財天様がお祀りしてある小さな御堂の前の参道で、ちょこんと！正座をして丁重にお参りをしていたそうです。それが原因でした。多分、おじいちゃんから、「佛様の前では正座しなさい」と日頃言われていた子のようです。

俊徳丸

高齢者講習を受けていないと免許更新ができませんと書かれたお知らせが届き、行ってきました。檀家さんから認知症検査があると聞いていましたが、それは無し。どうやら後期高齢者向け講習までボケの発覚が遅れるようです。

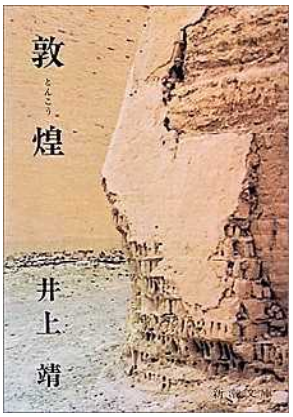


今まで眼科医院で受けたことのない検査がありました。動体視力は「やや良い」でしたが、夜間視力は「ふつう」。

「もうやめよかな、夜の高速道路を 120km で走るのは・・・」　迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

先日、WOWOW で『敦煌』があり、懐かしく観ました。１９８８年、日本中国合作映画。原作は井上靖の小説『敦煌』。佐藤浩市がまだ青年、西田敏行が精悍（蛭間病院長とはまるで別人）、渡瀬恒彦、田村高廣ご存命、三田佳子が美しい！　二十九年という歳月は感慨ひとしおです。かくいう私も映画館で観たのは学生の頃。改めて小説も読み返し、新たに敦煌への憧憬で心がいっぱいになりました。



小説『敦煌』は、ご承知の通り二十世紀初頭、敦煌莫高窟の第十七窟から万巻の古写本や画巻が発見された事実を由来とする物語。第十六窟の中の崩れ落ちた壁の中に四畳半ほどの小部屋（十七窟）があり、そこは壁を塗り込め封じられていた。いかなる謎がありやなしや。西夏（中国は宋の時代）による侵略の際、貴重な文書の焚書を恐れそこに隠したか。不要な物を納戸に詰め込み、ただ壁を塞いでしまっただけの事か。現在の研究では後者が定説のようですが、いらない物でも千年経てば七珍万宝。今や莫高窟は世界遺産。

こもりうた㉟

98年秋、会社員だった私は半月の休暇届と辞表を併せ持ち、上司に談判。見事休暇を勝ち取り十五泊十六日の中国西域辺境ツアーに行きました。北京からは電車やバスに揺られ、河西回廊を西へ西へ。最初は西遊記気分♫でしたが、やがて地平線も見飽き、疲れも出てくる出発から六日目、ようやく敦煌に到着。念願の莫高窟を懐中電灯片手に観光。続いて「敦煌故城」という映画『敦煌』の撮影地へも行きました。

京都太秦の映画村を思い浮かべるなかれ。そこは砂漠の真ん中に打ち捨てられた廃墟のような撮影跡地。観光客にすれ違うこともなく、砂塵の中、まさに映画『敦煌』を体感できる場所。当時12元（約200円）の入場料。調べたところ最近は40元だとか。

さらに西へ50㎞、「西のかた陽関を出づれば故人なからん」の陽関を見て心満意足。西遊記八日目も過ぎ、とっとと飛行機で帰りたいところですが、この後が長かった。砂漠で野営六泊七日。歩けど歩けど砂ばかり。二日に一度、漢代の烽火台の痕跡や風化土堆などに出会い、蜃気楼に惑い、野営三日目には少々凹み感情も枯渇。しかし四日目に達観。猫のようにトイレを済ます事にも慣れ、砂まみれにも慣れ、地平線と星を愛でる余裕も出てきました。途中に一度だけ出合ったオアシスで顔を洗った時の気持ち良さをご想像あれ。

敦煌市内に戻り、バザールで買い物をし、上海経由で帰国。職場の皆にバザールで購入した靴下を献上したところ、どれも左右の長さが違っていて「さすが中国」と笑い話でした。二十年経ってあの辺りも随分変わったのでしょうか。もう一度行きたい。砂漠野営は無しで、敦煌へ。

訶梨帝母

『お寺 de クリスマス』

12 月 24 日(日)に、私のお寺の本堂で『お寺 de クリスマス』という行事を計画しています。私が小学生だった頃は地元に公民館がなかったので子供会のクリスマス会をお寺の本堂で行っていましたが、今回は「宗教行事」として初めての試みです。もう何年も前からタイトルだけは決めてありましが、行事の流れのイメージがなかなか出来ずにいました。このままでは、私の寿命の方が先に尽きてしまうと感じ、思い切って今月行うことにしました。

私のお寺がある美濃の国「笠松」は豊臣秀吉公が発せられた「隠れキリシタン弾圧」が約 180 年間行われ、その「傷跡」が残る町です。同町を流れる木曽川の河川敷には現在も処刑場跡が残っていますし、街中には牢屋跡に建てられたお寺や、牢屋から処刑場まで罪人を連れて行った路地も残っています。密かに十字架が忍ばせてある古い石灯籠も存在します。「隠キリシタン」と聞いて皆さんがイメージするのは、「熊本県天草地方」、「天草四郎」等、ということになると思います。確かに学校の教科書にもそう記載されていました。美濃の国に「隠れキリシタン」が多く存在していたことを知っている人は地元でも少数です。それは、岐阜城主であった織田信長公が多くのポルトガルからの宣教師に美濃での布教活動を許可したためだと言われています。美濃へ入った宣教師たちは、現在の岐阜市「加納宿」から中山道を東へ布教活動を行ったようです。当時の笠松付近も、総人口の 25%～30%の人々がキリスト教に入信していたというデータがあります。それゆえ街道の近辺には、隠れキリシタンが命がけで祈った「マリア観音像」、「マリア地蔵像」が存在します。また井戸の横に水神さんをお祀りし、その「水」の字を上手く変形させ石に彫り「十字架」に見立てたものもあります。ではなぜインパクトが九州地方により強いのかと言えば、美濃の隠れキリシタンは江戸時代に入り 150 年程で消滅したのに比べ、九州地方はその存在が根強く明治時代初期まで存在したからでしょう。

私が住職をするお寺にも「マリア観音像」が御三方(そのうちお一人が坐像)と、隠れキリシタン弾圧に 180 年程使用された「踏み絵」が残されています。踏み絵は四角い真鍮製で、赤子のキリストをマリアさまが抱っこしている場面がレリーフされており、長年多くの人々に踏まれたせいなのか、マリアさまのお顔は「のっぺらぼう」状態です。金属がすり減るくらい人が乗ったのであれば、それだけ多くの人の命が助かったということで喜ばしいことなのですが… これを見ていると複雑な気持ちになります。なお、その「御調べ」は毎年 2 月に実施されたそうで、俳句の世界では「踏み絵」が 2 月の季語になっているそうです。これらが私のお寺に存在するのは、当時、天領地笠松を管理していた奉行の菩提寺だったせいでしょうか。没収したものの命がけで祈った像を破壊することもできず、お寺に納めたのかも知れません。また寺方も隠れキリシタンを異教徒扱いせず、「同じ信仰する者」として丁重に匿ったという資料も存在します。これも日本人の美しい「良さ」と言えるでしょう。

俊徳丸

除夜の雪

カレンダーも残すはあと一枚。大晦日のボンパラのことを考えています。除夜の鐘をボ～ンと撞くと、鐘楼門の上に綿帽子のように積もった雪がパラッと落ちる。ボ～ン、パラッ、でボンパラ。（注）

何年か前、大晦日が大雪になり、鐘を撞けるかどうか心配したことがありました。今年は別の意味で気がかりなのです。ご参詣の方が年々増え、108を超えて、一昨年は125も撞いたのです。今年はもっと増えると予想しています。

108の理由には大きく二説あります。

一つは、鎌倉時代、除夜の鐘を伝えた中国の宋からの影響。中国では暦の12ヶ月、24節、72候（1候は5日）を合わせて108、つまり1年分を撞いたという説。

二つ目は、徳川家康が帰依した浄土宗の説明が江戸時代に一般化したこと。人間が過去、現在、未来を通じてもっている108の煩悩（ぼんのう）を鐘によって打ち祓うという説です。

佛教の基本は煩悩を祓うことにより、解（げ）脱（だつ）（迷い、苦しみから抜け出し、悟りをひらくこと）することです。厳しい修行に耐えて煩悩を祓うことができれば良いのですが、凡人には難しいのが現実です。

除夜の鐘には煩悩を祓う効果があると信じられてきました。普段から修行を積んでいない人でも煩悩を祓い、迷いやみだれを清めて新しい歳を迎えよう、或いは豊作への願いを込めてという地方もあります。

由来を知ると、撞きたいと願う人の数を108人に制限することは大変難しい。むしろ、若者に「お作法」を覚えてもらう良い機会です。（撞く前に合掌して一礼する）

その上、拙寺には特殊事情があります。昨年、老朽化と白蟻の食害によって鐘楼門を解体。梵鐘を撞けませんでした。戦時中の金属回収令により昭和17年に梵鐘を拠出。6年間撞けなかった時以来のことです。「今年こそ」と、手ぐすね引く人がいます。

再建の際、門内の一階で紐を下に引けば、二階で鐘が鳴る工夫をしました。狭い階段が怖くて昇らなかった女性でも子どもでも鳴らせるのです。

撞木を新品に替えた結果、余韻が長くなりました。一打した後、30秒間空けています。（連打するとヒビが入る危険がある）

そうなると、単純計算でも1時間では全部終わらない。午後10時40分頃儀式を始め、最後の一打を午前零時過ぎ、それを合図に修正（しゅしょうえ）会の開式。段取りが悪いと、近隣住民全員が睡眠不足で元旦を迎える羽目に。

「紅白歌合戦」終了後に拙寺のボンパラに駆けつける人は、間に合いませんゾ！

迷走坊

（注）Youtube で人間国宝、故桂米朝師の「除夜の雪」の動画を観ることができます。

『私説法然伝』（３５）

極楽への道⑩

先月号では「恵心僧都源信」の『往生要集』に導かれるように法然上人は「念佛」の模索を始められたことについて書きました。今月はその続きになります。

【法然上人の模索の過程に関して『法然上人行状絵図』によると、恵心僧都源信の『往生要集』は善導大師の「注釈」を「指導の書」としており、法然上人はその「注釈書」である『観経疏』（観無量寿経疏・観無量寿経の注釈書）を読まれた、とある。『往生要集』から善導大師の『観経疏』へという過程ということである。しかし、その流れで後の法然上人の到達されたところである「本願念佛」（佛の本願により往生する）へは到達できるのであろうか？おそらく一本道では到達できなかったであろう。

法然上人は天台の教えをはじめとして諸宗の教えに通じておられた。『往生要集』だけが「先達の書」ではなかったと考えられている。念佛者であった永観禅師は『往生拾因』においてひたすら称名の念佛こそが勝れているとし、画僧として有名な珍海も称名は「正中の正因」としている。だがいずれも「凡夫」が「凡夫」のままで救われるということを示していない。法然上人の到達点はそこにはなかった。愚勧住信の『私聚百因縁集』には法然上人三十三歳の時に専修念佛の道へ進まれたとある。永万元年（一一六五年）の頃である。法然上人が『往生要集』を始めとして、様々な「念佛の道」に出会われ、そして『観経疏』と本質的に出会われていったのが法然上人三十三歳ごろであったのではないだろうか？それはまだ到達点とは言えないにしろ、法然上人に示された「極楽への道」であったのではないか。経蔵に籠もり苦しみの中のでの模索であったが、確かに法然上人は一つの到達点へと近づいていったのである。】

法然上人は『法然上人行状絵図』に記された「過程」でだけではなく、実際には様々な書物などを通して模索を重ねられたと言えます。永観禅師『往生拾因』などはその代表的なものだと言えます。そして善導大師の『観経疏』という圧倒的な存在とも言える書物に立ち向かっていかれた、と言うと大げさかもしれませんが、法然上人にとってはまさに人生をかけて「極楽への道」を歩まれていたのがこの時期であったのです。

以下次号に続く（征阿）

永観禅師（一〇三三年～一一一一年）

観経物語（１１２）

正宗分（しょうじゅうぶん）その66

散善（さんぜん）上品下生その１

《本文》

上品下生とは、また因果を信じ、大乗を謗らざるも、ただ無上道の心を発こす(のみ)此の功徳を以て、廻向して極楽国に生まれんことを願い求む。行者の命終わらんと欲する時、阿弥陀佛及び観世音・大勢至は諸眷属と与に、金の蓮華を持し、五百の化佛を化作して、此の人を来たりて迎う。

五百の化佛は、一時に手を授け、讃して言う。法子よ、汝は今清浄にして、無常道の心を発す。我来たりて汝を迎う、と。(行者)この事を見るの時、即ち自らの身を見るに、金の蓮華に坐せり。坐し已わりて華、合わす。世尊の後に従うに、即ち七宝の池中に往生するを得たり。一日一夜にして、蓮華乃ち開き、七日の中、乃ち佛を見るを得たり。

《意味・訳文》

上品のうち下の往生をする者とは、前の上品中生の往生をする者と同じく、因果の道理を信じ、大乗の教えなどを非難し謗ることはないが、ただ無上、最高の菩提(正しい悟り)を得ようとする心のみを起こす者である。是れによって得た功徳を振り向けて、極楽国に産まれることを願い求めるのである。この修行者が、その命を終えようとするとき、阿弥陀佛は、観世音菩薩や大勢至菩薩とともに、多くの従者たちをひきつれて、金の蓮華の台座を携えて、衆生を済度(救済する)のためにあらわれた五百人の佛は、一斉に手を差し伸べてほめ讃えて言う。

「法の子よ、あなたは今、清浄の心を持ち、最高の佛道を得ようとする心を起こしている。だからわたしたち化身の佛はあなたを迎えにきたのである。」

このありさまを見た修行者は、ふと我が身を振り返ってみると、いつしか金の蓮華の上に坐っているのであった。坐ったままでいると、その蓮華の華は閉じる。世尊の後に従って行くと、たちまち七つの宝石の水をたたえた池の中に往生することができる。そのまま一日一夜を経ると、坐していた蓮華の華が開き、さらに七日たつと初めて佛を目の当たりにすることが出来るようになる。

《私訳》

上品の上生、中生、下生と蓮華の花の開く時間が違うこと、開いた後の行者の様子や状態が違うことの差を大きいとするか小さいと思うか、此の後の中品、下生と比較して考えてみよう。

《妙星斎》